

# 原爆文学研究会報

第二三三号

原爆文学研究会 二〇〇八年四月

影 影は空所である。輪郭を持った暗い凶像に向き合うと、人間はそれを解釈せずにはいられなくなる。旧住友銀行広島支店入り口の石段に焼きつけられた人影も、まさにそのような空所である。これは一九七一年に広島原爆資料館に寄贈され、原爆の熱線の強烈さを伝える「人影の石」として、今なお展示され続けているものであるが、花崗岩の表面に刻印された異様な影は、影の主にとつての「その瞬間」を想像させずにはおかない。例えば、影の主が「なにか物思いに沈んでいたらしい」（豊島与志雄「ヒロシマ」への関心）、『東京新聞』一九四九年）というような解釈は早くからなされていた。

しかし、なぜ影の主は「物思いに沈んで」いなければならないのだろうか。人影は「彼がこの地に刻んだ戦争憎悪の永遠の訴えである」（青野季吉「広島と平和」、『世界』一九五〇年）、「今もそこに腰をかけてもの思いに沈んでいる」（長田新「序」、『原爆の子』一九五一年）といった、さらなる拡大解釈をも合わせ見れば、ここには、影の主に原爆を問い、告発する人物であり続けて欲しいという、見る側の願いが投影されていることがわかる。

むろん、この願いは、影に原爆への問いを喚起し続けて欲しいという願いと一体のものだったはずである。しかし、早くも一九五一年、峠三吉は次のように書かねばならなかった。「あの朝／何百度かの閃光で／みかげ石の厚板にサツと焼きつけられた／誰かの腰（略）憐れに善良で／てんと無関心な市民のゆききのかたわらで／陽にさ

らされ雨に打たれ砂埃にうもれて／年ごとにうすれゆくその影」（「影」、『原爆詩集』）。——石段を保存するだけでは、影は遺せない、というのが現実の法則なのだろう。（中野和典）

## 第二三三回 原爆文学研究会報告

二〇〇八年二月九日（土）九州大学六本松キャンパスで開催した「第二三三回原爆文学研究会」には約二百名が参加。



上村氏の発表については「登場人物の内面を問題にする前に、原爆をめぐる同時代的な状況と小説との関係を探った方が良いのではないか」「被爆者の内面を強引に造形して描くことの難しさを、さらに描くという小説の特異な構造に着目して論じた方が良いのではないか」等の質疑がありました。

森田氏の発表については「ここ数十年に製作された8・6のNHKスペシャルも合わせて分析した方が良いのではないか」「首相以上に一地方の長が脚光を浴びるといふ平和記念式典の特質にも注目した方が良いのではないか」等の質疑がありました。

◇ 研究発表 1

## 原爆と福永武彦 『死の島』

上村 周平

『死の島』（初出「文藝」昭和41・1〜46・8）が河出書房から上下二巻の単行本となった際、福永武彦は「原爆という私らしからぬ社会的問題を重要な主題として扱っている」と述べている。まずこの発言を真つ正面に受け止めることから『死の島』論を進めてみた。

萌木素子の被爆者としての人物造形は、心的外傷を受けた実際の被爆者たちと共通するものがある。そうした点を精神医学の言説を援用しながら確認した。例えば「内部」のカタカナで描かれる被爆直後のシーンでは、素子が無数の死者達と遭遇するが、その中でも比重が大きいのは自分が看病しながらも結局は死んでしまう一人の「女ノ子」のエピソードである。『ヒバクシャの心の傷を負つて』（中澤正夫）を参照すると、実はそうした記憶のあり方・傷つき方は「贖罪のためには、具体的な個人が中心に坐っていたほうが自分を納得させられる」という。その他に素子が自分の被爆体験を「癒えない傷」（十七日前）と語っているが、通常の心的外傷は時間経過によって症状が薄れていくが、被爆者の場合はそうならず「遷延」していくという点は抑えておく必要がある。

ところで素子は肉親ばかりでなく相見綾子の他に友人のいない孤独な存在として描かれているが、彼女の孤独は原爆という都市機能

や生活環境や人間関係の一切合切を破壊した未曾有の体験によってもたらされている点も見落とせない。福永武彦は「愛と死と孤独」などと甘美なイメージで語れることが多かったが、『死の島』の孤独は、友人・恋人の不在からくる孤独と同列に論じられるものではない。最後尾の「内部L」では「アレハ彼女自身ダッタ」とリフレインされ、被爆直後に出会った異形の死者達との連帯感ができたことが描かれているが、そのことは同時に生者たちとの連帯感が切れてしまったこと（孤独）を意味している。「白イ太陽」は原爆炸裂の瞬間を再現し、死の場面を再現する。こうした死の再現という事象は、『原爆詩一八一人集』（長津功三良編）に収録されている「歩く」（長津）、「ヒロシマ神話」（嵯峨信之）という詩にも見いだせ興味深い。

「わたしたちは別々にいくのね」と綾子との心中も連帯感は希薄であるが、その心中は小説の目次では、昭和二九年一月二三日となっている。史実ではその約一ヶ月後の三月一日、第五福竜丸の被爆事件が起こっている。「ヒバクシャの世紀」（藤原修『岩波講座8アジア・太平洋』所収）によれば、被爆体験が戦後広く認識されるようになったのは、この事件の後だという。時代が被爆者の声に耳を傾けようとするその直前に素子は死亡（あるいは発狂）している。ここにも素子の孤独な影がさしている。

なお質疑応答では、発表内容について多数のご意見やご批判を頂いた。他にも海外文学の影響等、様々な問題をさらに追究することで『死の島』の世界を広げるようご助言いただいた。深く感謝申し上げますとともに、今後は捌め手で『死の島』に取りかかりたいと思う。

◇ 研究発表2

## 平和式典テレビ中継番組の変遷と ローカルメディア

森田 均

テレビ放送が始まった一九五三年から二〇〇七年までの期間、長崎新聞、中国新聞、西日本新聞、朝日新聞（東京本社版）の八月六日、九日を発行日、あるいは当該月日のテレビ番組表が掲載されている朝刊を対象として平和式典テレビ中継の変遷を調査した。

広島式典のテレビ中継を最初に行ったのは、TBSで一九五七年に八時から特別番組として放送した。翌年にはNHKが中継を始め、ニュース番組内に吸収されていた時期を含み全国中継が続いている。民放の全国放送では、式典時間と重複あるいは隣接する時間帯に放送される朝のワイドショーで取り上げられた。一九七五年にはNHKと地上波民放四系列が揃った広島のテレビ局は、現在に至るまで式典中継の特別番組を放送し続けている。長崎では、一九五八年にテレビ放送を開始したNHKが翌年から広島の式典中継を続けている。広島式典の中継は、時間的に朝のニュースショーやワイドショーで取り上げられやすく、たいていの場合、高校野球は開会式を行う日となっている。

長崎式典のテレビ中継を最初に行ったのは、長崎放送(NBC)で一九六三年一〇時四五分から一時五五分の番組であった。NBCの中継は同年から現在まで途切れることなく毎年続けられている。一

九六九年に放送を開始したテレビ長崎(KTN)は一九七一年から式典中継を開始し、二年の中断を経て現在に至っている。さらに一九九〇年に放送を開始した長崎文化放送(NCC)は日曜日となった一九九二年と一九九八年を除いて式典中継を続けている。一九九一年には長崎国際放送(NIB)が開局し、同年から中継を始めている。長崎では平成に至って地上波の四系列が出揃ったことになるのだが、新たなチャンネルが誕生すると県内ではあるが必ず式典中継の番組も増えている。なおNHKは、一九九一年には同時刻に国会代表質問が放送されたため、一九九二年にはオリンピック中継のため、一九九三年には細川内閣組閣の特別番組のために長崎式典を教育チャンネルから県域で放送した。またNHKは、一九七〇年から一九九九年まで長崎式典を九州管区で高校野球を中断し一時から一時二〇分まで中継していた。NHKの長崎式典全国中継は、ようやく二〇〇〇年に始まったが、長崎県域放送の開始時刻よりも一〇分遅かった。長崎式典がNHKで完全に全国中継されるようになったのは二〇〇五年である。

以上のように、広島と長崎の平和式典は、当該県域のメディア環境整備の差異も考慮する必要があるもののテレビ番組として同列に扱われていたとは言い難い。これを仮の結論として、私の研究は、二〇〇七年より三カ年の予定で広島、長崎、福岡、東京において八月六日及び九日のアナログ地上波全チャンネルの放送を録画する作業と平行して継続する。紙の記録に映像が加わり、過去に対して常に現在を対比させながら内容分析とその背景を探る考察を続ける予定である。

## 彙報

### 第二三回 原爆文学研究会

- 日時 二〇〇八年二月九日(土) 一四時より
- 会場 九州大学六本松キャンパス大学院棟一〇一号室
- 研究発表

原爆と福永武彦『死の島』

上村 周平

平和式典テレビ中継番組の変遷とローカルメディア

森田 均

### 機関誌 「原爆文学研究」 第七号原稿募集

本研究会が年に一回発行している「原爆文学研究」の原稿を左記の要領で募集します。この機関誌には「原爆文学」の評論の他、エッセイ等も掲載します。奮ってご投稿下さい。

○書 式 縦書き、三〇字×二四行、二段組。

○投稿締切 手書きやプリントアウト原稿での投稿の場合は二〇〇

八年八月中旬、データファイル (Word か 一太郎) を添付しての投稿の場合は同年八月末日。

○発行経費 投稿者は、各自の原稿一頁(機関誌の書式)につき、一、〇〇〇円を発行経費として負担する。

○投稿宛先 〒八五七一一一九三 佐世保市沖新町一一一

佐世保工業高等専門学校 中野和典研究室

## 編集後記

会報の巻頭エッセイにはいつも頭を悩ませています。文字数わずか七〇〇字程度。分量だけを見れば、原稿用紙二枚にも満たない短さですが、独特の難しさを感じます。会報発行時の時事的な問題や、数十年前の文献を読んでの雑感などを題材に書いておりますが、さらさらと筆が進んだ試しがありません。個人の文章作成能力にも問題があるに違いありませんが、これまでに巻頭エッセイをお書きになった他の方々も同じような難しさを感じて来られたのではないかと、勝手ながら想像しております。

そもそも執筆者を数人に限ってきたのが誤りでした。論文にするようなものではないが、七〇〇字程度の器に盛るにはちょうど良いという発見を、広く会員の皆様からお寄せいただいた方が、内容も充実するに決まっています。上記の機関誌へはもちろん、巻頭エッセイへのご投稿もお待ちしております。(N)

発行元 原爆文学研究会事務局

〒八一一一六五二〇 福岡市中央区六本松四一一一

九州大学大学院比較社会文化研究院 波瀾剛研究室内

tel/fax 092-726-4595 e-mail [tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp](mailto:tnamigata@scs.kyushu-u.ac.jp)

URL <http://www.scs.kyushu-u.ac.jp/~th/genbunken/index.htm>